

(2) 品種の特性と栽培法

あきたこまち

1) 来歴

昭和50年、福井県農業試験場において、「コシヒカリ」を母、「奥羽292号」を父として人工交配したF₂種子の一部を昭和52年に秋田県農業試験場が譲り受け、系統選抜による選抜固定後、昭和57年(F₇)に「秋田31号」の系統名がつけられ、昭和59年に「あきたこまち」と命名された。本県においては平成4年度に奨励品種として採用している。

2) 特性

「アキヒカリ」より4日程度晩熟の極早生種、長稈(8~9cm程度)、穂長は同程度、穂数はやや多い、中間型の草型である。葉色は濃~やや濃、止葉はやや大きく立ち、下葉は枯れ上りやすいが熟色は良い。稈の太さはあるが稈質が不十分であるため耐倒伏性はやや劣る。着粒はやや疎で短芒を少程度有し、稈先色および稈色は黄白、脱粒性は難である。高温登熟性は「中」である。

玄米の形状は中、千粒重は「アキヒカリ」よりやや軽く小粒に属する。粒の飴色は中、稀に心白・腹白を生ずるが外観品質は極めて良い。

病害抵抗性は、葉・穂もちにやや弱く、白葉枯病には罹りやすい。耐冷性は「アキヒカリ」よりやや強く、穂発芽性はやや難である。

「アキヒカリ」のような多肥による増収は期待できないが、食味はコシヒカリに匹敵し優れている。

3) 適地

北部・高冷地帯(標高400m~、年平均気温13℃未満)の地力中庸~肥沃地での普通栽培に適する。ただし、白葉枯病常発地、日照条件の悪い水田は避ける。

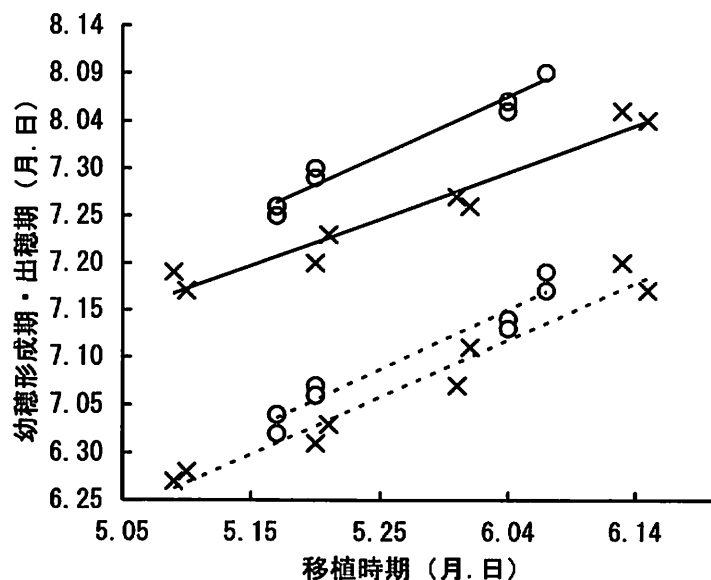
4) 栽培法

ア 播種・育苗

低温では発芽勢がやや鈍く、穂発芽性がやや難であるため、浸種を十分に行って発芽を揃えるとともに、薄播きに心がける。また、苗は短く、葉色が濃い性質があるので、高温育苗、過かん水などにより徒長苗をつくらぬよう温度・水管理を適正に行う。

イ 移植時期

移植時期と幼穂形成期、出穂期の関係は第I-5-1図の通りである。移植時期は5月上旬~下旬が適し、出穂期は7月下旬~8月上旬となるの



第I-5-1図 移植時期と幼穂形成期、出穂期の関係
(平成16、17年試験、岡山農試)

○：真庭市蒜山、×：津山市

実線：出穂期、破線：幼穂形成期

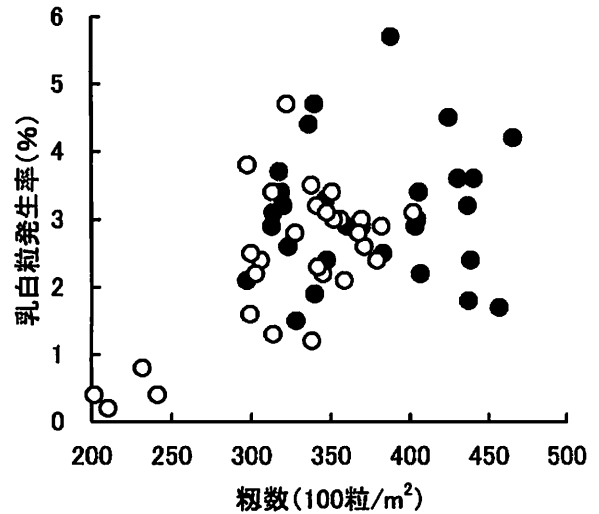
が望ましい。晩植えは稈の充実が不十分となり倒伏しやすい。

ウ 栽植密度

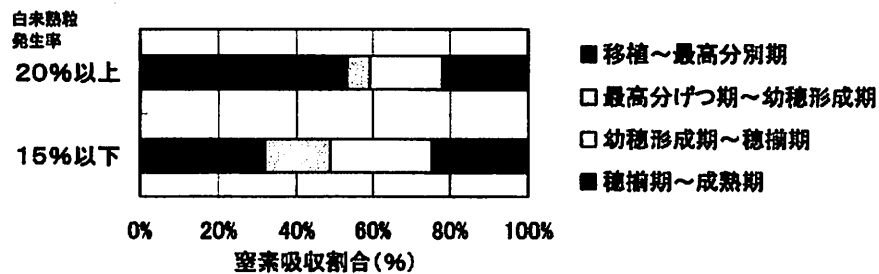
穂数確保は比較的容易であるが、初期生育がやや緩慢となる傾向があり、低温等の不良環境下では生育が停滞しやすい。そのため、比較的標高の高いところでは22株/㎡程度のやや密植とする。標高の低い地域では過繁茂、㎡当たり穂数過多により乳白、心白粒などが発生することがあるので、やや疎植（18株/㎡）とすることも必要である（第I-5-2図）。

エ 施肥

生育前半の葉色が比較的濃く、施肥に対する穂数の反応が敏感で㎡当たり穂数の確保は比較的容易である。しかし、生育初期に窒素が多く吸収されると、弱小分げつの発生で過繁茂となり、登熟不良、倒伏につながり、収量に結びつかない。また、これにともない後半の窒素吸収が低下すると、登熟期の高温で白未熟粒の発生など品質低下につながりやすい（第I-5-3図）。さらに、いもち病に対する抵抗性が多肥条件で低下しやすいので、窒素過多にならないように注意する。



第I-5-2図 あきたこまちの㎡当たり穂数と乳白粒発生率
（平成16年試験、津山市、岡山農試）
○：17.8株/㎡、●：27.6株/㎡



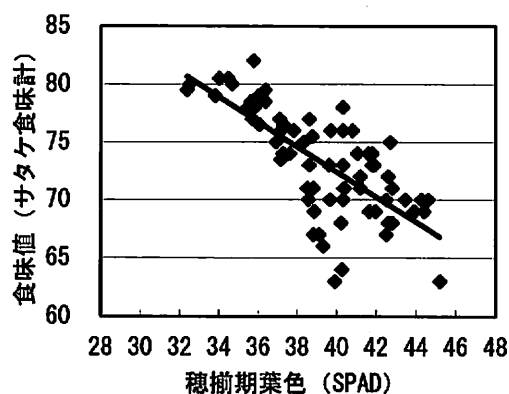
第I-5-3図 白未熟粒発生率別の窒素吸収割合
（秋田県農試、1999年、品種あきたこまち）

このため窒素施用法は第I-5-1表を標準とする。分施肥では分げつ肥は移植後10日目、穂肥は生育量、葉色に応じて2回に分けて施用する。穂肥までに葉色が落ち過ぎる場合はつなぎ肥（10a当たり窒素成分1kgまで）を施用する。

1回目の穂肥は、出穂20～16日前頃（幼穂形成期～幼穂長5mm）に施用するが、生育が旺盛で葉色が濃い場合は減量または無施用とする。2回目は出穂10日前頃に施用するが、過剰施用やこれより遅くに施用すると玄米タンパク質含有量を上昇させ、食味を低下させやすいので注意する。ただし、高温条件下では登熟後半の窒素不足により背白、基部未熟粒などが発生し品質が低下しやすいため、登熟後半まで適度な葉色を維持できるように穂肥を施用する（第I-5-4、5図）。

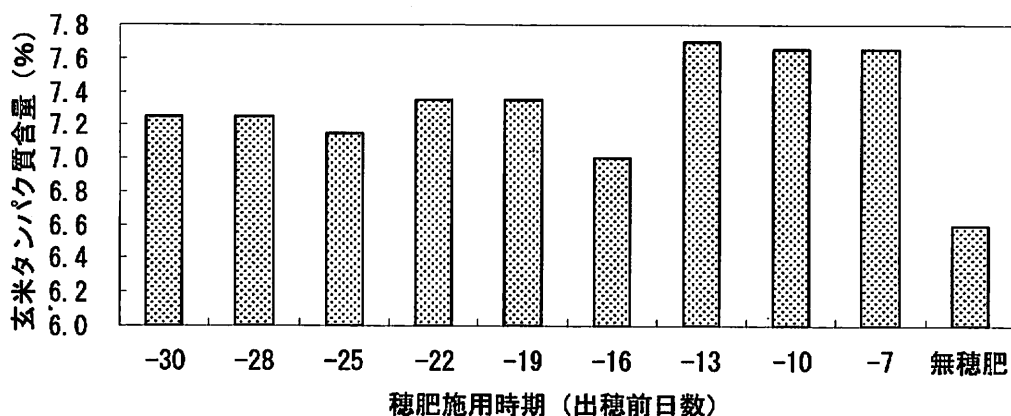
第 I-5-1 表 窒素の標準施用量および分施肥法

| 地帯 | 総量 (kg/10a) | 分施肥法 (kg/10a) | | |
|-------|----------------|---------------|------|----|
| | | 基肥 (うち分けつ肥) | 中間追肥 | 穂肥 |
| 黒ボク | 9 | 6 (1.5) | — | 3 |
| 灰色低地土 | 7 | 4 (1.5) | — | 3 |



第 I-5-4 図 あきたこまちの穂揃期葉色と食味の関係
(平成 17 年、岡山農試)

注 1) サンプル数：赤磐市 38、津山市 28
真庭市 4、岡山市 4



第 I-5-5 図 あきたこまちの穂肥施用時期と玄米タンパク質含量
(平成 17 年試験、岡山農試)

注 1) 窒素施用量：基肥は 2 kg/10a、穂肥は 3 kg/10a を 1 回施用。

オ 病虫害防除

いもち病に対する抵抗性は「アキヒカリ」よりやや強いが、年次または窒素過多により穂いもちが発生することがある。また、白葉枯病に罹りやすいため防除が必要である。なお、標高の低いところでは過繁茂となって紋枯病が発生しやすくなるので注意する。

「あきたこまち」はカメムシ類による斑点米が発生しやすいので、畦畔の草刈り及び薬剤による防除を徹底する。

カ その他

無効分けつ期には中干しを行い過剰生育の抑制、有効茎の充実に努めるとともに発根

を促す。ただし、根の張りがやや弱いので極度に強い中干しは避ける。また、登熟後期に下葉が枯れ上がり、稈質が低下しやすいので、落水期まで間断灌溉を続ける。

コシヒカリ

1) 来歴

昭和20年、新潟農試において、「農林22号」を母、「農林1号」を父として交配、福井農試で固定選抜後、昭和28年に「越南17号」の系統名がつけられ、昭和31年に「コシヒカリ」と命名（「水稻農林100号」に登録）された。本県においては昭和62年度に奨励品種として再採用（前回：昭和36年～41年）している。

2) 特性

「あきたこまち」より5日程度晩熟の早生種で、長稈であるため耐倒伏性は弱である。穂長はやや長く、穂数は同程度。草型は中間型である。草姿、熟色ともに良好であるが、節間伸長期の草丈の伸長が著しく、多窒素条件で倒伏しやすい。

粒着はやや密で一穂粒数が多く、粒大はやや小さい。心白、腹白ともに少なく、光沢に富む。まれに登熟不良による腹白等を生じ品質低下を招く。

病害抵抗性は、葉・穂いもちともに弱で、白葉枯病、紋枯病に対しては中程度である。耐冷性は強く、穂発芽性が難である。

収量性は、「あきたこまち」に劣るが、食味は現存品種中の最高ランクに位置する。

3) 適地

北部地帯（標高200m～350m、年平均気温13～14℃）の肥沃地～地力中庸地での少肥・普通栽培、南部地帯の早期栽培に適する。ただし、いもち病常発地、冷水田、日照条件の悪い水田は避ける。

4) 栽培法

ア 播種・育苗

低温発芽性が低く、穂発芽性が難であるため、浸種を十分行って芽出しを揃えとともに、薄播きに心がける。また、苗は徒長しやすい性質があるので、育苗中の温度・水管理を適正に行い、初期分けつの確保が容易となる健苗を育成する。

イ 移植時期

早期から普通期（5月上旬～下旬）植えて良質・多収である。晩植えは稈の充実が不十分となり倒伏しやすい。

ウ 栽植密度

穂重の大きい割に穂数の確保が比較的容易であるが、やや密植（植付株数20～21株/m²程度）とする。

エ 施肥

分施体系では、基肥重点施肥で稈長が伸び倒伏の発生などにより減収しやすいので、第1-5-2表のとおり追肥重点の施肥とする。追肥重点により総粒数は減少するが登熟歩合、千粒重などの増加により多収となる。

基肥は壤土では代かき直後、砂壤土では代かき前とし、いずれも分けつ肥は移植10日後、穂肥は2回に分け、下位節間がほぼ伸長した出穂18日前頃に1回目を、同10日前頃に2回目を施用する。

第 I - 5 - 2 表 窒素の標準施用量および分施肥法

| 土 質 | 総 量 (kg/10a) | 施 用 量 (kg/10a) | |
|-----|-----------------|----------------|-----|
| | | 基 肥 (うち分けつ肥) | 穂 肥 |
| 壤 土 | 6 | 3 (1.5) | 3 |
| 砂壤土 | 7 | 4 (1.5) | 3 |

オ 病虫害防除

いもち病、紋枯病に罹りやすいため、窒素過多にならないよう注意し、発生状況に応じて防除を行う。

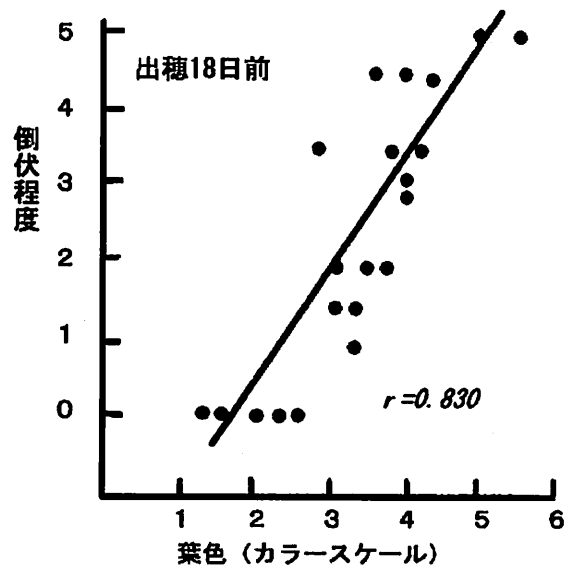
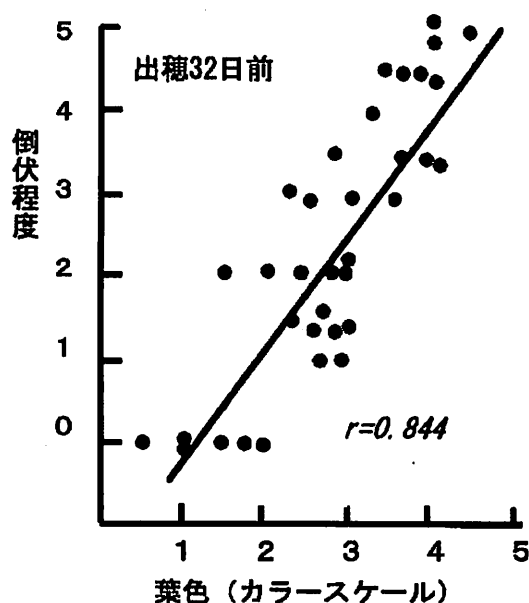
カ 倒伏防止

(ア) 中干し

倒伏防止のため、有効茎確保後直ちに中干しを行い、以後落水期まで間断灌がい続ける。

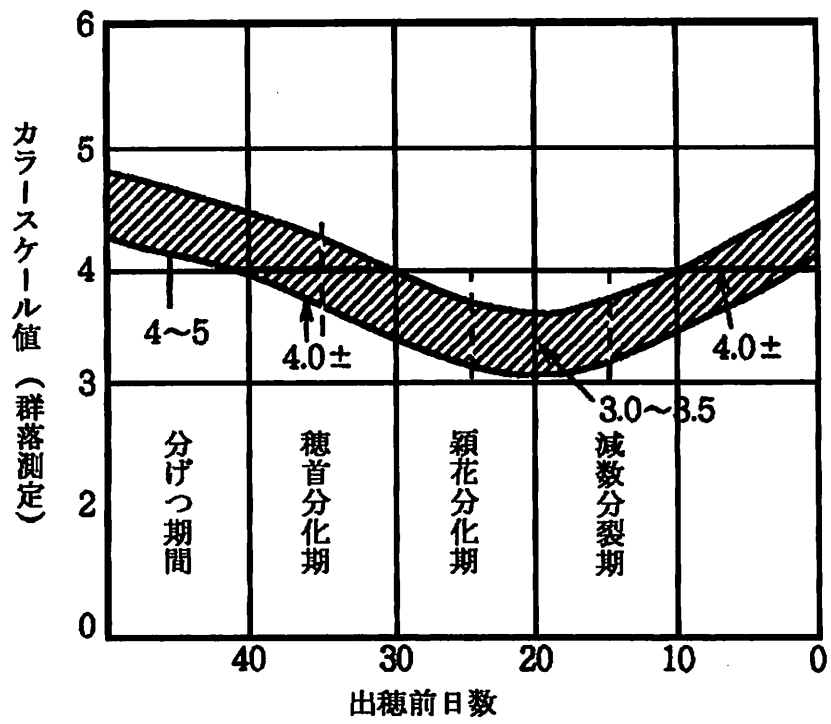
(イ) 倒伏軽減剤の施用

有効茎確保後の葉色が濃い(カラースケールで5以上)場合に倒伏の危険があるので、植物成長調整剤の使用を検討する。(第 I - 5 - 6 図および「II 栽培の基本技術、倒伏と軽減対策」の項を参照)



注) 倒伏程度：0 (無) ~ 5 (甚)

第 I - 5 - 6 図 出穂32日前および18日前の葉色値と倒伏 (富山農試 1980)



第 I-5-7 図 適正な葉色の推移模式図 (広島県 1989、1994)

日本晴

1) 来歴

昭和32年愛知県農業試験場において、「東海7号（ヤマビコ）」を母、「中稈2号」を母とし「新山吹」を父とするF3雑種個体を父として人工交配を行い、以後同場で固定選抜をはかり、昭和38年「日本晴」と命名された。岡山県では、昭和45年に奨励品種に採用された。

日本晴は日本初の世代促進による育成品種で、倒伏に強く、収量が安定しており、当時としては品質も良く、安定していることから、全国的に広く栽培されてきた。しかし、近年、良食味志向が強まる中、栽培面積は減少している。

2) 特性

「コシヒカリ」より10日晩熟の早生種で、短稈で茎はやや太く、倒伏には強い。穂長はやや短く、穂数は中程度で、草型は中間型である。

止葉は直立して草姿・熟色ともに良く、脱粒性は難、玄米は中位中形で心白の発生程度は中、腹白の発生程度は少だが、光沢が優れ、胴割れが発生しにくく、やや良質である。

いもち病、白葉枯病、紋枯病の抵抗性は中位である。ごま葉枯病の発生はやや多く、秋落抵抗性が弱い。イネカラバエ耐虫性は強く、穂発芽性は難である。

収量は多肥条件で明らかな増収傾向が認められることから、肥沃地あるいは多肥栽培に適する一方、秋落田や地力の低い水田には不向きである。

3) 適地

中北部および北部地帯の肥沃地および多肥栽培に適している。秋落田や地力の低い水田には不向きなので、土地の選定を誤らないようにする。

4) 栽培法

ア は種・育苗

発芽性は良く、葉は立ち、がっしりしているので、稚苗、中苗、成苗のいずれにも適している。

イ 移植時期

5月下旬から6月上旬が適するが、稚苗、中苗では遅植えにならないようにする。

ウ 栽植密度

地域の実情に応じて、㎡当たり18~20株を目安に加減する。

エ 施肥

短稈で耐倒伏性は強いが、節間伸長期に窒素を多用すると倒伏し、収量・品質が低下する。窒素量は全量で10a当たり10kgを標準とし、50~60%を基肥、15%を中間追肥、30%を穂肥として施す。

穂数が特に多くはないので、早期に茎数を確保する必要がある。穂肥は積極的に施用し、籾数の増加を心がける。

単位面積当たり籾数の増加には、追肥の施用時期を穂首分化期（出穂32日前）とし、穂肥の施用時期と施用割合を穎花分化前期（出穂23日前、幼穂長1mm）とその1週間後に1：1に分施するのが効果的で、増収が見込まれる。

第 I - 5 - 3 表 10 a 当たり標準施肥成分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 追肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|-----------|----------|------|----------|
| N | 9 ~ 11kg | 4 ~ 6 kg | 2 kg | 3 ~ 4 kg |
| P ₂ O ₅ | 9 ~ 11kg | 9 ~ 11kg | | |
| K ₂ O | 10 ~ 12kg | 5 ~ 6 kg | 2 kg | 3 ~ 4 kg |

オ 病虫害防除

いもち病には中程度の抵抗性だが、窒素過多になると発病が増す。また、山間部のいもち病常発地帯での栽培は適さない。

縞葉枯病には強くないので、極端な早播き、早植え栽培は避ける。また、ごま葉枯病、穂枯れには強くないので、やせ地、老朽田などの秋落田での栽培は避ける。

吉備の華

1) 来歴

昭和55年岡山県立農業試験場において、「朝日」を母、「シズヒカリ」を父として人工交配を行い、F3雑種を蒔培養した。以後同場で選抜をはかり、昭和62年から岡山蒔7号の系統名で地域適応性を確かめた。この結果、優良と認められたため、平成元年に奨励品種に採用、「吉備の華」と命名された。

「吉備の華」は、倒伏に強く、品質、食味も「朝日」に似て良いことから、県中南部を中心に普及している。

2) 特性

出穂期、成熟期は、「ヒノヒカリ」とほぼ同じで、「アケボノ」より15日程度早熟の中生種である（6月中旬移植）。稈長は「ヒノヒカリ」と同程度、耐倒伏性も同程度に強い。穂数は「ヒノヒカリ」より少なく草型は穂重型である。脱粒性は「ヒノヒカリ」より脱粒しやすい中程度で、短芒がまれに生じる。玄米はやや長めの中位で、「朝日」並の大きさである。腹白は少なく良質で、食味は旭系の良食味である。

いもち病抵抗性は弱く、紋枯病には中である。また、ごま葉枯病の発生はやや多く、秋落抵抗性がやや弱い。穂発芽性は中である。

収量は、秋落田や地力の低い水田では劣る。

3) 適地

南部及び中部の南縁で、日当りの良い平坦地に適応する。地力の劣る水田や極端な少肥条件下では秋落傾向を示して登熟が劣るので、地力は中庸から肥沃な水田が良い。

4) 栽培法

ア は種・育苗

稚苗、中苗、成苗を問わず適応する。発芽性が良いので乾田直播にも適応するが、縞葉枯病の抵抗性はないので、極端な早播きは避ける。

イ 移植時期

6月上旬から下旬が良いが、中部地帯では早めに移植する。

ウ 栽植密度

南部地帯の肥沃地では、 m^2 当たり15~22株ならば収量に大きな影響はないが、中部地帯あるいは地力の劣る水田や少肥栽培を行う場合は m^2 当たり20~22株とする。

エ 施肥

穂数が特に多くはないが、標準的な栽培を行う場合は施肥法(分施割合)にあまりこだわる必要はない。ただし、葉色は濃い方なので、施用量と施用時期には注意する。地力中庸な水田においては、総窒素量を10a当たり10~12kgとして、分施肥では以下に示すような分施割合にする。

第 I - 5 - 4 表 10 a 当たり標準施肥成分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 追肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|---------|--------|-------|-------|
| N | 10~12kg | 4~6kg | 1~2kg | 3~4kg |
| P ₂ O ₅ | 8~11kg | 8~11kg | | |
| K ₂ O | 9~12kg | 4~6kg | 1~2kg | 3~4kg |

オ 病虫害防除

縞葉枯病抵抗性はなく、いもち病抵抗性は弱く、紋枯病は中程度なので、穂いもちの防除は中部地帯では必ず実施する。また、天候不順年や追肥過多で過繁茂になった場合などには紋枯病の防除が必要になる。縞葉枯病の被害が予想される水田では、早植を避け、ヒメトビウンカの防除を行う。

第 I-5-5 表 目標収量とその収量構成要素

| 目標 収量 (10a 当たり) | 最高 莖数 (本/m ²) | 有効莖 歩合 (%) | 穂数 (本/m ²) | 一穂 粒数 (粒) | 登熟 歩合 (%) | 千粒 重 (g) | その他 |
|-----------------------|---------------------------------|------------------|---------------------------|-----------------|-----------------|----------------|------------------|
| 500kg | 300 | 75 | 250 | 95 | 92 | 23.0 | 標肥栽培でやや基肥重点施肥を行う |
| 600kg | 410 | 75 | 310 | 100 | 87 | 22.5 | やや多肥栽培でやや後期重点施肥 |

ヒノヒカリ

1) 来歴

宮崎県総合農業試験場において、昭和54年に強稈、良質多収の早生品種「愛知40号（黄金晴）」を母、極良食味の早生品種「コシヒカリ」を父として人工交配し、F6世代以降系統栽培によって選抜固定をはかり、昭和61年「南海102号」の系統名を付した。平成元年に「水稻農林299号」として登録され、「ヒノヒカリ」と命名された。岡山県では平成9年に奨励品種に採用した。その後、県南部を中心に急速に普及し、平成13年に「アケボノ」を抜いて本県で最も作付け面積の大きい品種となった。

2) 特性

出穂期、成熟期は、「吉備の華」とほぼ同じで、「アケボノ」より15日程度早熟の中生種である。

茎数は「吉備の華」並で、「アケボノ」より少ないが、有効茎歩合が高く、穂数は「吉備の華」より多く、「アケボノ」よりやや多い。草型は偏穂重型で葉色はやや淡い。

稈長は「アケボノ」より15cm程度短く「吉備の華」と同程度で、耐倒伏性は比較的強い。穂長は「吉備の華」と同程度だが一穂粒数は多く、面積当たり粒数は確保しやすく、収量性は「吉備の華」並である。

玄米は「コシヒカリ」並のやや小粒で、色沢は濃飴色で、外観品質は優れるが、刈り遅れると茶米が増加しやすい。食味は粘りが強く良食味である。

いもち病抵抗性は中程度で、白葉枯病に弱い。脱粒性が難、穂発芽性は「コシヒカリ」と同様の難である。

種子の休眠が深く、吸水～出芽の期間が通常の品種より1～2日長い。

3) 適地

南部及び中部の南縁で、土壤の適応範囲は広いが、肥沃地で増収が見込まれる。白葉枯病の常発地での栽培は避ける。

4) 栽培法

ア は種・育苗

種子の休眠が深く、出芽の遅れやばらつきが生じやすいので、移植栽培では浸種期間を通常より2日程度長くする。

直播栽培では、出芽・苗立ちは「アケボノ」等より期間を要する。休眠の覚醒は低温下で遅れるため、早播きは避ける。

イ 移植時期

6月上旬から下旬が良い。

ウ 栽植密度

南部では、 m^2 当たり17～19株を目安とし、穂数確保・穂揃い向上のため過度な疎植を避ける。

中部で水利慣行によりやむを得ず5月中に早植えする場合、 m^2 当たり20株を目安とする。

エ 施肥

南部における土壤別の施肥量の目安は、10a当たり窒素総量で埴壤土で9～10kg、壤土～砂壤土で10～12kgとする。

第 I-5-6 表 南部における10 a 当たり標準施肥成分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 追肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|--------|--------|--------|--------|
| N | 9～12kg | 4～6 kg | 1～2 kg | 4～5 kg |
| P ₂ O ₅ | 8～11kg | 8～11kg | | |
| K ₂ O | 9～12kg | 4～6 kg | 1～2 kg | 4～5 kg |

分施肥系では、基肥は分けつを促すよう初期の肥効を確保するとともに、過繁茂、倒伏、籾数過多を回避し、また、穂肥を予定どおり施用できるよう、穂肥施用時期の葉色が適度に薄れるような施用量とする。穂肥時期の葉色はカラスケールで4前後を目安とし、穂肥の窒素施肥量は、成熟期まで葉色が維持されるよう、「アケボノ」、「吉備の華」より窒素成分で1 kg程度増量を目安とし、地力を考慮して加減する。

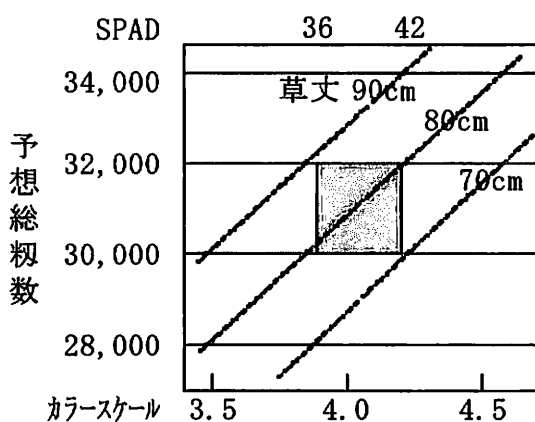
中部で5月中旬に早植えする場合、栄養生長期間が長くなり、栄養生長停滞期（ラグ期）が生じる。ラグ期の稲体窒素濃度の低下は有効茎歩合並びに一穂籾数の低下（短穂化）や出穂期の前進をまねき、減収と玄米品質低下の危険性が高まるので、以下のような分施肥割合が望ましい。

第 I-5-7 表 中部での早植栽培における10 a 当たり施肥成分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 分けつ肥 | つなぎ肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|--------|--------|--------|------|--------|
| N | 9～12kg | 4～5 kg | 1～2 kg | 1 kg | 3～4 kg |
| P ₂ O ₅ | 8～11kg | 8～11kg | | | |
| K ₂ O | 9～12kg | 4 kg | 1～2 kg | 1 kg | 3～4 kg |

注) 穂肥は2回に分けて施し、1回目と2回目の施用量の比率は1：2とする。

砂質田、やせ地など、分けつ末期や登熟後半に肥切れしやすいほ場では、肥効の持続する被覆肥料、緩効性肥料が適する。一発肥料(被覆肥料)は銘柄により肥効のパターンがかなり異なるので、ほ場の保肥力、肥沃度等を考慮して選択する。被覆肥料を用いる場合は、窒素施用量を分施肥系より1～2割減らす。



第 I-5-8 図 穂肥直前の診断基準 (福岡県)

最適籾数30,000～32,000粒を確保するための診断基準

が草丈・葉色の適正範囲

オ 病虫害防除

いもち病は予防的な防除体系とする。白葉枯病が発生する恐れのある地域では、葉いもちの防除と兼ねる。

カ 収穫

刈り遅れると茶米が増加しやすいので、特に適期収穫に努める。出穂期から成熟期までの日数は概ね38～45日、収穫適期の目安は出穂期以降の積算気温が950～1,100℃、青味籾率が20～5%になった時期で、収穫の適期幅の許容範囲はあまり広くない。

朝日

1) 来歴

「朝日」は、西日本における良質米の代表的品種として昭和初期に一時代を画した「旭＝京都旭」から選抜された晩生種である。本県では京都府農業試験場から「京都旭」を取り寄せて地域適応性を確かめ、大正14年に奨励品種に採用した。その後、純系淘汰によって稈長が短く、品質のよい「朝日47号」を選抜し、「旭」や「京都旭」との混同をさけるため、昭和6年「朝日」と命名した。

「朝日」は、良食味品種として高い評価を受けてきたが、倒伏と脱粒が原因で一時的に付加が減少した。しかし、昭和末期頃から消費者の良質米志向に対応して徐々に増加し、現在では約3,600ha栽培されている。

2) 特性

出穂期、成熟期は「アケボノ」並の晩生種で、稈長は「アケボノ」より長く、草型は穂重型である。耐倒伏性は弱い。穂数は「アケボノ」並であるが、分げつ力が弱い。脱粒性は極易で、芒は少ない。玄米は「アケボノ」並の中粒で、腹白は少なく良質で、食味は良い。

いもち病に対しては弱く、紋枯病にはアケボノ並の中で、穂発芽性はやや難である。

収量は、アケボノよりやや劣るものの、年による変動は少ない。

3) 適地

栽培適地は南部地帯の地力中庸な平坦地で、間断灌がいや中干し等の水管理が容易にできる砂壤土から埴壤土の水田が良い。

第I-5-8表 目標収量と収量構成要素

| 目標収量 | 最高分げつ期茎数 | 有効茎歩合 | 穂数 | 1穂粒数 | 登熟歩合 | 千粒重 |
|--------|------------------|-------|------------------|------|------|------|
| kg/10a | 本/m ² | % | 本/m ² | 粒 | % | g |
| 500 | 430 | 75 | 320 | 80 | 82 | 24.0 |
| 600 | 480 | 75 | 360 | 80 | 85 | 24.5 |

第I-5-9表 地力中庸な水田における10a当たり施肥成分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 追肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|--------|-------|-------|-------|
| N | 7～10kg | 3～4kg | 1～2kg | 3～4kg |
| P ₂ O ₅ | 8～12kg | 8～12 | | |
| K ₂ O | 8～12kg | 4～6 | 1～2 | 3～4 |

4) 栽培法

ア 種・育苗

稚苗、中苗、成苗を問わず適応するが、播種量は極力薄播きとする。乾田直播では、5月中旬から下旬に播種し、播種量はひかえめにして、無効分げつを抑えるようにする。

イ 移植時期

6月上旬から中旬が良く、遅くとも6月中には移植する。

ウ 栽植密度

m²当り 18~20 株の栽植密度を目安とする。ただし、倒伏しやすいので、肥沃なほ場や早植えでは疎植とする。

エ 施肥

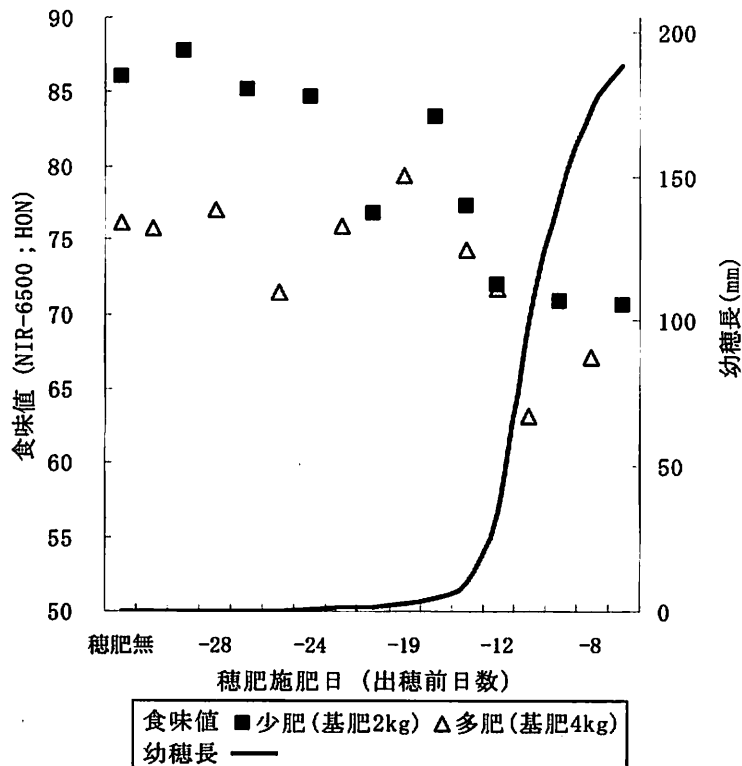
倒伏しやすいので、窒素の施用量はやや少なめとし、分施体系では基肥を減じる。穂肥は幼穂長 2~5mm (出穂約 20 日前) 頃に施肥し、肥効の落ちない場合は遅らせるか減量する。また、幼穂形成期以前の穂肥は倒伏を助長し、幼穂長 10mm 以降 (出穂約 14 日前) の穂肥は食味の低下につながるのを避けた方がよい。一般的には総窒素量を 10a 当り 7~10kg として第 I-5-9 表に示すような施肥法にする。さらに、堆きゅう肥や土壌改良資材等の施用によって土づくりの徹底をはかる。

オ 水管理

7 月下旬に中干しを行って無効分げつの抑制と倒伏防止をはかり、幼穂形成期以後は間断灌がいにより、根の活力を維持して登熟を高める。

カ 病虫害防除

いもち病に弱いので、肥培管理に注意するとともに、適正防除につとめる。また倒伏を助長する紋枯病、セジロウンカ、トビイロウンカ、コブノメイガ等の防除に留意し、ヒメトビウンカについても適切な防除を行う。



第 I-5-9 図 穂肥時期と食味値の関係 岡山農試 (平成 17 年試験)

アケボノ

1) 来歴

昭和14年兵庫県立農業試験場において、「農林12号」を母とし、「朝日」を父として人工交配を行い、昭和17年に雑種後代を岐阜県立農事試験場が供試材料として配布をうけて選抜固定を図った。昭和22年から農林省安城農事改良実験所に引継ぎ、昭和24年「東山62号」の系統名を付し、昭和28年に農林省東海近畿農業試験場から「水稻農林80号」として登録、「アケボノ」と命名された。岡山県では昭和32年に奨励品種に採用した。

2) 特性

「朝日」と出穂期、成熟期がほぼ同じ晩生種で、稈長は「朝日」よりやや短く、耐倒伏性はやや強い。穂長、穂数は中程度で草型は偏穂重型である。まれに短芒を生じ、脱粒性は易で「朝日」よりやや脱粒しにくい。玄米の形状は中位で「朝日」並の大きさだが、粒幅がやや大きいため「朝日」よりも腹白が多く、見かけの品質はやや劣る。玄米中の蛋白含有率が低く、食味は「朝日」に似て良食味である。いもち病、白葉枯病、紋枯病の抵抗性はいずれも中程度で、穂発芽性も中である。

収量性は場所による変動が比較的小さく安定しており、直播栽培にも好適である。

3) 適地

南部地帯の地力中庸から肥沃な平坦地が適しており、普通栽培では土壤を選ばずに収量が安定している。

4) 栽培法

ア 種・育苗

稚苗、中苗、成苗のいずれにも適応するが、1株植付苗数が3～4本になるよう極力細植えに心がける。また、乾田直播では播種量をひかえめにして無効分げつを抑えるようにするとともに、極端な早播きは避ける。

イ 移植時期

6月上旬から下旬が良いが、稚苗、中苗では遅植えにならないようにする。

ウ 栽植密度

m²当たり16～20株の栽植密度とする。

エ 施肥

「朝日」に比べて耐倒伏性は強いので、一般的には「朝日」並かやや多めの施肥量にし、全窒素量は10a当たり10～11kgを施す。また、標準的な栽培を行う場合は施肥法にあまりこだわる必要はないが、標準としては、分施体系では40～50%を基肥、20～30%を中間追肥、30%を穂肥として施す。腹白の多発による品質低下を回避するには、穂肥を2回に分けて施用する。1回目の穂肥は出穂前20日～18日に10%、2回目の穂肥は出穂前10日～7日に20%を施す。

過度の多肥栽培を行うと過繁茂となり、品質や食味の低下をまねくので、施用量には注意が必要である。

第 I-5-10表 10 a 当たり標準施肥分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 追肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|---------|--------|--------|--------|
| N | 10～11kg | 4～5 kg | 2～3 kg | 3～4 kg |
| P ₂ O ₅ | 8～11kg | 8～11kg | | |
| K ₂ O | 9～12kg | 3～5 kg | 2～3 kg | 3～4 kg |

オ 病虫害防除

いもち病に対しては、「朝日」よりやや強い程度なので、発生が予想される場合は予防的防除を行う。縮葉枯病抵抗性はないので、早植えを避け、ヒメトビウンカの防除を行う。また、その他の病虫害についても慣行に従って適期に防除する。

ヒメノモチ

1) 来歴

昭和37年東北農業試験場において、「大系227」を母とし、「こがねもち」を父として人工交配を行い、北陸農業試験場における世代促進を経て、F6世代以降系統栽培によって選抜固定をはかった。昭和44年から「奥羽糯277号」の系統名で地域適応性を検定した結果、有望と認められ、昭和47年に「水稻農林糯221号」として登録、「ヒメノモチ」と命名された。岡山県では、平成元年に地域適応優良品種に採用した。

2) 特性

出穂期、成熟期は「あきたこまち」並かやや早く、極早生に属する。稈長は「あきたこまち」と同程度だが、耐倒伏性は十分でない。穂長は、「あきたこまち」と同程度で、穂数は少なく、草型は偏穂重型である。粒着密度は密で、極短い芒がまれに見られ、ふ先色は白で脱粒性は難である。玄米の形状と粒大は中で光沢・はぜが良く、玄米の外観品質並びに食味は良好である。

いもち病抵抗性は中で、耐冷性はやや強に属し、穂発芽性はやや易である。糯種としては収量性が高く安定している。

3) 適地

北部から高冷地までの地力中庸から肥沃地に適している。

4) 栽培法

移植時期は5月上旬から5月下旬が良いが、高冷地では遅植えにならないようにする。また、栽植密度は㎡当たり20～22株度とする。

稈長がやや長く、耐倒伏性は中程度なので、極端な多肥栽培は避け、全窒素量は10a当たり9～10kgを標準とし、基肥の過用は避ける。

ふ先色が白で、草型も粳品種とあまり変わらないので、粳品種との混種には十分留意する。

第I-5-15表 10a当たり標準施肥成分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 追肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|---------|---------|-------|-------|
| N | 9～10kg | 4～5kg | 1～2kg | 2～3kg |
| P ₂ O ₅ | 10～12kg | 10～12kg | | |
| K ₂ O | 9～11kg | 4～6kg | 1～2kg | 3～4kg |

ココノエモチ

1) 来歴

昭和52年愛知県農業総合試験場山間技術実験農場において、「中部26号」を母とし、「稻系糯108（中部糯37号）」を父として人工交配を行い、以後系統育種法により選抜固定をはかり、昭和60年から「中部糯57号」の系統名で地域適応性を検定した結果、有望と認められたため、昭和63年「水稻農林糯293号」として登録、「ココノエモチ」と命名された。岡山県では、平成元年に奨励品種に採用した。

2) 特性

出穂期および成熟期は、「コシヒカリ」とほぼ同じで、「日本晴」より10日程度早熟の早生種の糯で、稈長は「日本晴」並かやや短く、耐倒伏性は強い。穂長、穂数は「日本晴」並で草型は偏穂数型である。粒着密度は中で、まれに短芒を生じ、ふ先色は赤褐で、ふ毛が多く、脱粒性は難である。玄米の形状・粒大は中で、玄米の品質並びに食味は糯種としてはやや良である。

いもち病には強く、白葉枯病抵抗性は中程度である。穂発芽性は難で、耐冷性は強に属する。

収量性は安定して多収である。

3) 適地

中部山間、北部、高冷地までの地力中庸から肥沃地に適し、秋落ち地帯での栽培は避ける。

4) 栽培法

中部山間、北部では、移植時期は5月中旬から6月上旬が良く、栽植密度は m^2 当たり18～20株とする。高冷地では遅植えにならないようにし、栽植密度は m^2 当たり20～22株とする。

やや多げつ性で葉は垂れる傾向があり、株元の風通しが悪いため、紋枯病にかかりやすい。基肥の過用は避け、細植えを守るとともに、紋枯病の防除に留意する。

根張りが浅いので、極端に強い中干しを避けるとともに、その後の間断灌がいを行行し、登熟歩合の向上を図る。

第 I - 5 - 16 表 10 a 当たり標準施肥成分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 追肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|---------|---------|-------|-------|
| N | 9～11kg | 4～6kg | 1～2kg | 3～4kg |
| P ₂ O ₅ | 10～11kg | 10～11kg | | |
| K ₂ O | 10～11kg | 5～6kg | 1～2kg | 3～4kg |

ヤシロモチ

1) 来歴

昭和23年農林省出雲農事改良実験所において、「陸稻（おかいね）」を母（1回親）、「朝日」を父（反復親）としたB3F4個体を母とし、「早生桜糯」を父として人工交配を行い、昭和26年島根県農事試験場において選抜固定をはかり、昭和33年から「山陰糯60号」の系統名で地域適応性を検定した結果、有望と認められたため、昭和36年「水稻農林糯135号」として登録され、「ヤシロモチ」と命名された。岡山県でも同年奨励品種に採用された。

2) 特性

出穂期、成熟期は「吉備の華」と同じで中生種に属する。稈長は長く、やや少げつだが、穂数は「吉備の華」並で、草型は穂重型である。穂長は「吉備の華」よりやや長く、粒着は中からやや密で、紅褐色の長芒をつけ、護穎色は赤紫色で、脱粒性は難である。玄米はやや大粒・中形で玄米の品質は良好、食味は糯種としては良である。

いもち病抵抗性は中程度で、ごま葉枯病には弱く、秋落抵抗性はやや弱である。

収量性は多収である。

3) 適地

中部から南部地帯にかけての地力中庸からやや肥沃地に適する。ごま葉枯病・穂枯れには弱いので、秋落田での栽培は避ける。

4) 栽培法

稚苗、中苗、成苗のいずれにも適するが、苗丈が伸びやすいので、稚苗では極端な厚播きを避ける。また、移植時期は5月下旬から6月中旬が良いが、中部では遅植えにならないようにする。

栽植密度は㎡当たり16～20株とする。耐倒伏性が劣るのであまり密植にはせず、窒素の施用量はやや少なめとし、総施用量は10a当たり9～10kgとする。

また、紋枯病、ごま葉枯病、白葉枯病の防除にも留意する。

第I-5-17表 10a当たり標準施肥成分量

| 肥料成分 | 総量 | 基肥 | 追肥 | 穂肥 |
|-------------------------------|--------|--------|-------|-------|
| N | 9～10kg | 3～5kg | 1～2kg | 3～4kg |
| P ₂ O ₅ | 8～10kg | 8～10kg | | |
| K ₂ O | 9～11kg | 4～5kg | 1～2kg | 3～4kg |